日本建築学会大会学術講演梗概集
（近畿） 2014 年 9 月

# チッソ所蔵史料からみた朝鮮窒素肥料の興南地区社宅街

正会員　○辻原　万規彦*

日本窒素肥料　電気化学工業　稟議書
工場財団　配置図　デジタル化

## １．はじめに

既報[1] では，公益財団法人野口研究所所蔵の史料を用いて，朝鮮窒素肥料の興南地区社宅街の全体像を明らかにすることを試みた。しかし，この段階では，朝鮮窒素肥料が属した日本窒素肥料グループの社内資料（稟議書，会議議事録などの関係資料）の現物を閲覧できていなかった。その後，これらの資料を閲覧することができたので，既報の内容も踏まえ，新たに判明した内容を報告する。なお，当時の用語や呼称はそのまま用い，引用文などは原則として現代仮名遣いに改めた。

## ２．日本窒素肥料グループの社内資料の概要

既報の段階では，日本窒素肥料グループからチッソに至る社史[2] が未公刊であった。また，社内資料については，川村和男[3] が整理して作成した 11 分冊に及ぶ抄録集である『日本窒素の重要書類抄録』を用いていた。

チッソには，昭和２年に設立された朝鮮窒素肥料の社内稟議書の綴りが，欠落があるものの昭和２年度より昭和 20 年度まで保管されている。ただし，昭和 16 年に日本窒素肥料に合併されたので，以降は各工場ごとの稟議書である。また，昭和９年と 13 年に登記申請した工場財団関係資料をはじめとする各種書類も閲覧できた。稟議書には人事関係のものもあるが，今回は，建築関係を主に，土木や福利厚生関係などに焦点を絞って閲覧し，デジカメで撮影した[4]。さらに，史料に添付されていた大判の図面を中心にスキャン作業を行った。最終的には，合計 189 枚の図面をスキャンもしくはデジタル化できた。

なお，これらの書類は，朝鮮窒素肥料の親会社であった当時の日本窒素肥料大阪本社に送付された書類と推測される。そのため，添付されていない図面も多い。稟議書や図面の原本は，興南地区にあった朝鮮窒素肥料本社事務所に保管されていたと考えられる。

## ３．工場敷地の選定

工場の敷地として，実際に建設された興南地区の約 90km 南に位置する元山も検討された。元山港に接した買収候補地２箇所が選定され，社長の野口遵の元には地籍図の写しも送付されていた。元山港は明治 13 年に開港し，大正７年には元山・敦賀間の航路が開設された。昭和初期には既にある程度の港湾設備が整備されていたことが有利に働いたと考えられる。

## ４．社宅街の復原図の修正

既報で示した復原図と今回入手できた昭和９年と 13 年段階の社宅配置図[5] の比較より，以下のことがわかった。

湖南里社宅街については，重役社宅の等級に若干の誤りがあるものの，復源図は概ね正確であった。ただし，社宅街内の主要な道路の幅員は五間であり，供給所付属商店には昭和９年段階では共同浴場が含まれた。さらに，幾つかの建物の用途が判明した。また，１区の社員社宅と２区の準社員社宅は「側廻リ煉瓦積小屋組木造屋根セメント瓦葺」，３区の傭員社宅は「側廻リ煉瓦積小造（筆者注：木造か？）平屋建室内畳敷キ木骨小屋組屋根セメント瓦葺」と記され，社宅の構造が明らかになった。

九龍里社宅街についても，昭和９年と 13 年の配置図と既報の昭和 10 年代後半の復原図と併せて示す（**図１**）ことによって，時間と共に社宅や建物が増減する様子（**表１**）が確認できる。なお，**図１**中の昭和 10 年代後半の復原図は，今回入手できた配置図により，一部修正した。

柳亭里社宅街では，幅員 10ｍの道路と排水溝で南北が区分され，南側の社宅街の区画は 64m×100m，道路の幅員は南北方向 10m，東西方向 8ｍであるなど，各種の寸法が明らかになった。さらに，幾つかの建物の用途も判明し，既報では慰安娯楽施設がないとしていたが，武道場・娯楽場も建設されていたが明らかになった，

また，これまで史料がなく復原ができていなかった雲城里社宅街についてはも昭和 13 年段階の配置図が確認できたが，本宮社宅街については依然不明なままである。

## ５．確認できた建築物の図面

既報の段階では，個々の建物の図面はほとんど確認できていなかった。今回，社宅，寮，病院ならびに興南地区の本事務所などの図面が確認できた。**図２～図６**に示

表１　九龍里社宅街の建物の増減

| | ４区 | ５区 |
|---|---|---|
| S9 | 5B×29 棟，病院分院，共同浴場，ボイラー室，住宅・電灯係出張所，仮供給所・倉庫 | 5B×14 棟 |
| S13 | **増** 5A×10 棟，合宿 5 棟，3B×10 棟，4A×5 棟，郵便所，事務所・供給所・倉庫，共同浴場・ボイラー室増築 | **増** 5B×14 棟 |
| S10 年代後半 | **増** 5?×15 棟，合宿 2 棟<br>**減** 3B×10 棟，4A×5 棟，合宿 1 棟 | **増** 5?×3 棟 |

※「5?」は「5 号 A 社宅」もしくは「5 号 B 社宅」などの意味

Company Town Constructed by the Chosen Chisso Hiryo Hungnam Factory Using Mterials Owned by the Chisso Corporation

Makihiko TSUJIHARA

す。**図２**と**図３**[6] は，間取り程度ではあるが，現在確認できるほぼ唯一の社宅と寮に関する図面である。社宅や寮については，面積や数量のみが大阪の日窒本社に報告され，図面については興南で保管したため，図面が少ないと考えられる。**図２**中の「松村」は，当時，電燈係係長であった「松村季雄」と考えられる。**図４**[7] は，朝鮮窒素肥料の本社が置かれていた「本事務所」の図面である。設計は既報でも指摘したが，長く建築関連の組織の長を務めた伊東文吉であり，製図は蓑田事である。彼らについては，今後の調査が必要である。**図５**[8] と**図６**[9] は，病院に関する図面である。これまでは写真でしか確認できなかったが，内部の様子や住居スペースを併設した分院の様子が判明した。なお，**図５**は設計者不明，**図６**には重村可守巳のサインと伊東文吉の印鑑が確認できる。また，既報で示した供給所の建設時期は，写真と入手できた図面が一致しないため，誤りであることがわかった。

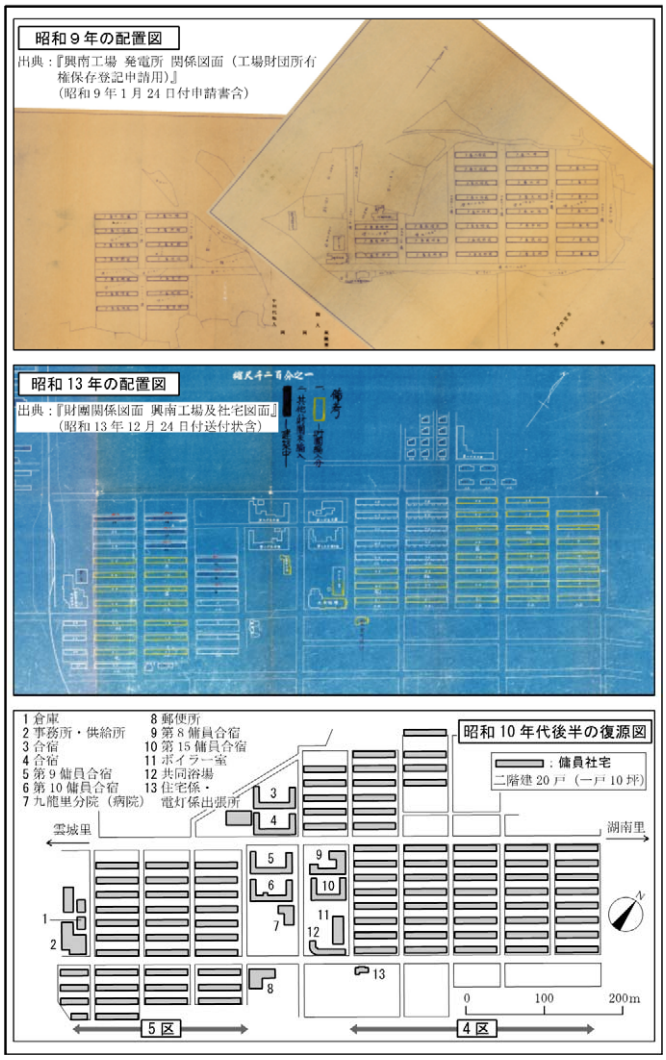


図１　九龍里社宅街の昭和９，13，10 年代後半の配置図

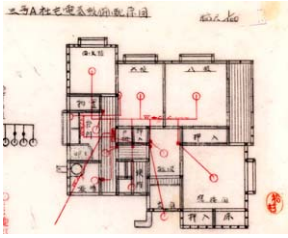

図２　３号 A 社宅平面図

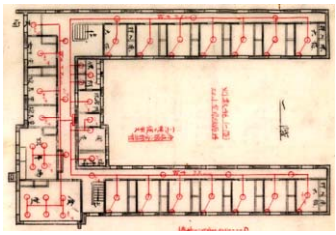

図３　雲城里社員合宿平面図

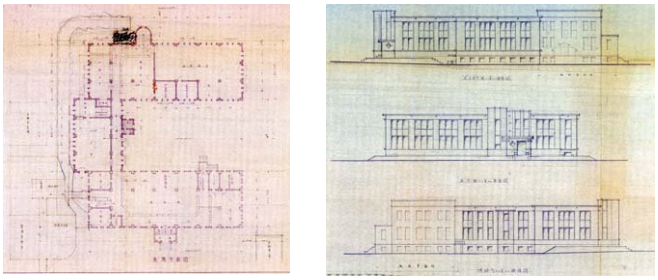

図４　本事務所増設工事設計図（左：１階平面図）

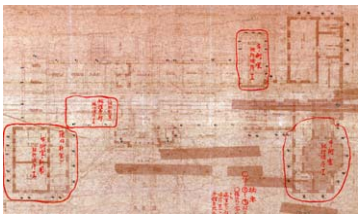

図５　附属病院本館増設設計図（１階平面図）

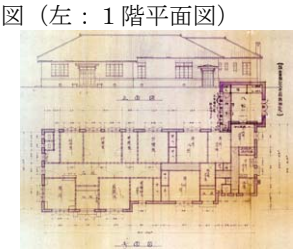

図６　興南九龍里病院設計図

## ６．まとめ

戦前期の朝鮮に建設された朝鮮窒素肥料の興南地区の社宅街について，日本窒素肥料グループの社内資料を用いて，新たに判明した内容を報告した。

**謝辞：**資料収集にあたっては，チッソ（株）社史編纂室 松永一敏様，チッソ（株）大阪事務所 齊藤継男様（当時）はじめチッソ（株）の皆様にお世話になった。本稿の一部は，平成 24 年度公益財団法人大林財団研究助成（研-4-57）による成果である。記して謝意を表す。

**注・引用文献**

1）辻原万規彦：朝鮮窒素肥料の興南地区社宅街について-野口研究所所蔵史料を用いて-，日本建築学会計画系論文集，第 671 号，pp. 135-142，2012. 1
2）チッソ社史編纂室編，日本経営史研究所編集協力：風雪の百年 チッソ株式会社史，チッソ，2011. 9
3）文献 1）では，「川村和男」を「川崎和男」と誤記していた。訂正すると共に深くお詫び申し上げたい。
4）興南地区以外の事業地である永安や阿吾地などの書類は，閲覧やデジタル化ができていない。
5）チッソ所蔵『興南工場 発電所 関係図面（工場財団所有権保存登記申請用）』（昭和９年１月 24 日付申請書含），『財團関係図面 興南工場及社宅図面』（昭和 13 年 12 月 24 日付送付状含）に所収
6）両者とも，チッソ所蔵『昭和 10 年度 II 朝鮮窒素肥料稟議書』所収の図面より一部抜粋
7）チッソ所蔵『昭和 11 年度 I 朝鮮窒素肥料稟議書』所収の図面より一部抜粋
8）チッソ所蔵『昭和 19 年度９～11 月 日窒興南工場稟議書』所収の図面より一部抜粋
9）チッソ所蔵『昭和９年度 II 朝鮮窒素肥料稟議書』所収の図面より一部抜粋

*熊本県立大学環境共生学部　准教授・博士（工学）　*Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.